

勤勉がエンターテイメントになるとき

——ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』における帝国・サーカス・慈善活動——

Diligence and Entertainment: The British Empire, Circus, and Charity in Virginia Woolf's *To the Lighthouse*

井上 美雪

Miyuki INOUE

序

イギリスはスコットランド・ヘブリディーズ諸島のある町で、サーカスのポスター張りの作業が行われていた。

The vast flapping sheet flattened itself out, and each shove of the brush revealed fresh legs, hoops, horses, glistening reds and blues, beautifully smooth, until half the wall was covered with the advertisement of a circus; a hundred horsemen, twenty performing seals, lions, tigers ... (TL 13)¹

そこに通りかかったのが、オクスフォード大学の高名な哲学教授を夫に持つ50歳代の Mrs Ramsay で、夫と8人の子供のほか友人知人らを招いて、スカイ島をモデルにした島にある別荘で夏を過ごしているところであった。彼女は慈善事業に熱心で、上流・上層中産階級の女性に典型的なアマチュア活動として慈善を行うのではなく、「貧困問題を解明する調査員」(TL 11)になりたいという熱意を持っており、別荘に来てもお慈善活動に励んでいる。そして、いつものように病気で苦しんでいるある労働者階級の女性の慰問に行く途中でこのポスターを見かけたのである。ポスターが消費を喚起するものだとしたら、このポスターは見事にその役割を果たしていると言えるだろう、このポスターを眺めた彼女は、次のような反応を示したのだから。“Let us all go!” she cried, moving on, as if all those riders and horses had filled her with child-like exultation and made her forget her pity” (TL 13).

この描写が、ヴァージニア・ウルフによる1927年の『灯台へ』(To the Lighthouse) の第1部からの引用であり、この第1部の設定が20世紀初頭(詳細に述べるなら1909年9月)(Bradshaw xvii)であることを考慮すると、宣伝の対象となっているサーカスおよび Mrs Ramsay の反応については、どの

ように解釈するべきだろうか。本論は、サーカスとそれが引き起こす感情を当時の社会的・文化的文脈に置いて読み解き、なぜここで描写されたサーカスが Mrs Ramsay を興奮させ魅了することに成功したのかを分析し、それが社会的に意味するところを明らかにするものである。

結論を先に述べるならば、社会調査に赴く途上でサーカスのポスターを目にした彼女が子供のように喜んだのは、慈善活動とサーカスのつながりにある必然性があったからである。それこそが19世紀から20世紀初頭のイギリスで論議を巻き起こしていた勤勉・規律・鍛錬を至上のものとする価値観である。本論は、勤勉の称賛が、慈善活動においてのみならず、エンターテインメントにまで見受けられるようになった20世紀初頭のイギリス社会のありようとそこに見られる緊張関係を明らかにするものである。そのために以下で、調教された動物と鍛え上げた芸を披露するサーカス団員の両者が表象する勤勉と鍛錬が、衰退の兆しを見せ始めていた大英帝国の衰退を食い止める手段として本作品に描かれている様を分析していく。

1. 帝国の植民地支配と猛獣

まずは、サーカスのポスターに描かれた動物に注目してみよう。描かれている動物は、馬、アシカ、ライオン、トラである²。このうち、馬とアシカはイギリス国内で生息したり飼育されていたが、ライオンとトラは、イギリスが植民地としていたアフリカやインド産の動物である。当然ながらイギリスの植民地支配を喚起させる動物であり、多くのイギリス人はたとえ自ら植民地に赴くことはなくとも、豊富なイラストで読者を引き付けた大衆紙が猛獣狩りの絵を多く掲載していたため、海を越えた自国の植民地でイギリス人が野生の猛獣を打ち倒す様をよく目にしていたのである。こうした猛獣狩りはイギリスの人々に自分たちには世界の果ての植民地において野性を支配しその土地の人々を守る義務があることを認識させていた点で、帝国支配を支える装置でもあったのである。“It was also about asserting control over people through control over beasts. The tiger was the bounty, the prey, and the challenge. The British took up the charge of defending their subjects from tigers...” (Kete 14).

逆もしかりで、植民地原産の猛獣は植民地からの抵抗を表象する存在でもあった。猛獣のこうした表象の二面性については、例えば本作品の時代設定より少々遡るものの、大々的に報道された9歳の少年がトラに噛みつかれた事件に対する人々の反応によく表れている。これは、1857年、船でロンドンに到着したトラが翌日偶然にも檻の門を外して外に飛び出し、これを見てはしゃいで手を出した9歳の少年に噛みついた事件である。このトラの販売を取り扱っていた Carl Jamrach はイギリスでは有名な熱帯動物の販売業者であるが、すぐさまバールを手にしてトラに殴り少年を救出し、少年は怪我をただけで済んだのだった。少年の父は Jamrach を訴えたが、裁判官は Jamrach の責任は認めただけで、その勇敢な救出行動は罰よりも賞賛がふさわしと判断し、最低限の賠償を命じただけであった (Simons 23)。一方で、1857年は東インド会社に雇われた現地のセポイ兵たちが反乱を起

し、1859年まで続いたセポイの反乱が始まった年であった。“[I]n 1857 the minds of the English were very much set on Bengal tigers as they had watched in horror as the previously loyal sepoy of the East India Company's Bengal army rose up against British rule and were subsequently joined by units from other parts of India” (Simons 23). このようにトラやライオンは、猛獣をねじ伏せるイギリス人の勇敢さを証明するとともに、帝国への反抗を想起させる存在でもあったのである。

少年がトラにかまれた事件は単発のものであり、またそのショッキングな性質ゆえに植民地の動物がもたらす両極端なイメージを端的に示しているが、日常的にイギリスの人々は植民地の動物に対して一般的にいかなるイメージを抱いていたのか、サーカスの動物について論じる前に整理しておきたい。植民地の動植物と帝国の関係についてはすでに多くの研究があり、その焦点は動物園での展示に当てられている。本論でのサーカスにおける動物の扱いと対比するために、まずは動物園での動物展示を通じて帝国と植民地の関係がいかに動物およびその展示方法に刻印されていたかを見ていきたい。

イギリス初の科学的な動物園が開園したのは、1828年のロンドン動物園であるが、19世紀はイギリスのみならず欧米で動物園が次々と設立されていった時代であった。19世紀を通じて他にもアムステルダム (1839)、ベルリン (1844)、ブダペスト (1866)、シカゴ (1868)、ニューヨーク (1873) で動物園が設立されていったが、それらの動物園では動物たちは、'the cultural context from which these animals supposedly came' (Brantz 89) を考慮して展示されていた。とはいえ、たとえばベルリン動物園ではインドの寺院を模した動物舎にアフリカ産の象が収容されていたこともあった (Brantz 89)。しかしそうした矛盾に観客たちが気付くことはなく、檻の中のエキゾチックな動物が植民地の環境で展示されていることで、観客は帝国の栄光や広大さを感じ、文明や科学の中で生きる自分たちのプライドを誇ることができたのだと Brantz は結論付けている (89-90)。こうした帝国イメージの展示は動物園だけに限ったことではなく、植物園、博物館、博覧会は「植民地を『他者』として差異化したり、植民地支配を正当化したりする『帝国』のスペクタクル空間」として演出されることがあった (伊藤 53)。イギリス社会全体で“the domestication of empire” (Brantz) への志向が存在していたのである。

また注目すべきは、動物園が当初の科学教育の提供という目的から転じて徐々にエンターテイメントを提供するアミューズメント・パークへと変貌を遂げた点である。ロンドン動物園はロンドン動物学会 (1826年設立) によって運営されていたが、この学会の目的は、動物園の入園料により専門的で科学的な学術研究を推進することと、人々にポピュラー・サイエンスを提供して彼らの知的水準を高める教育娯楽施設を設立することであった (伊藤 51-57)。しかし、シーズンごとに珍しい動物を購入しなければ来場者を引き付けられないことが判明し、1850年代になると動物園は「科学のアミューズメント・パーク」として、「営利目的の見世物の興行主と同じように、つぎつぎとエンターテイメントの要素を取り入れ」るようになり、商業的成功を求めようになった (伊藤64-66)。だがこのために動物学会は、1843年に制定された文芸科学団体支援法により文芸科学団体として認定され救済

税免除を受けていたにもかかわらず、その認定を取り消されてしまった。動物園の見物客に科学的な知識や経験を伝授する姿勢より、むしろ人気のある動物の展示や子供を象の背中に乗せるアトラクションなどのエンターテインメントを提供する姿勢ゆえのことであった(伊藤 67)。だが、法廷は認定を取り消したものの、純粋に科学的な研究よりも「健全な娯楽」を提供しようとする動物学会の姿勢を積極的に評価し、むしろこの役割のほうが重要だとコメントした(伊藤 68)。動物学会は、教育娯楽機関として社会的に評価を受けたのである。

こうした健全な娯楽教育機関としての評価は、動物園が階級を超えてすべての人々を惹きつけていた点で公共性を確立していたからこそでもあった。異なる社会階層がそれぞれ異なる娯楽を楽しんでいた時代にあって、動物園はすべての人々に開放されており、「特定の社会出自、ジェンダー、年齢層の人々に占有されることなく様々な見物客」が押し寄せたのであり、例えば労働者にとっても動物園は支配層によって押し付けられた社会統制としての娯楽ではなく、自ら積極的に楽しんだものだったのである(伊藤 51)。ロンドン動物園はあらゆる人に開かれた場所であり、そこで人々は教育と娯楽を同時に楽しんでいたのであった。

以上をまとめれば、植民地の猛獣は、人に対して牙をむくときには、植民地からの抵抗を思い出さずにはいられない存在であったのである。だが、猛獣が動物園で飼育される際には、世界各地に植民地を持つ自分たちの帝国の偉大さを感じることができるよう人工的な展示が演出されており、あらゆる階層の人々が野生動物を娯楽や消費活動の対照として捉えるようになっていたのである。“[T]he new public gardens [zoos] were intended to celebrate the bourgeoisie and to extol that class's values of science, progress, education, the extension of law and commerce, and the importance of public recreation” (Rothfels 101).

2. Mrs Ramsay と帝国の表象

ここで、Mrs Ramsay と帝国の関わりについて確認しよう。注目すべきは、ポスターを目にした直後の慰問先で、彼女とヴィクトリア女王が重ねて表象されている場面であろう。同行者である男性の目には、Mrs Ramsay が次のように映っている。

[S]uddenly, in she came, stood for a moment silent …, stood quite motionless for a moment against a picture of Queen Victoria wearing the blue ribbon of the Garter, and all at once he [Mr Tansley] realized that it was this: it was this: — she was the most beautiful person he had ever seen. With stars in her eyes and veils in her hair, with cyclamen and wild violets — what nonsense was he thinking? … Stepping through fields of flowers and taking to her breast buds that had broken and lambs that had fallen … (TL 15)

Mrs Ramsay は大英帝国がもっとも繁栄を誇ったヴィクトリア朝を治めた女王になぞらえられているのである。特にヴィクトリア女王が付けているガーター勲章は、君主と皇太子と彼らに仕える24人の騎士にしか与えられない最古かつ最高位の勲章である。ここでのヴィクトリア女王はイギリスの君主であることを強調した姿で描かれているのである。そしてそのヴィクトリア女王になぞらえられた Mrs Ramsay は星の輝きを目に宿していると描写されているが、この星はガーター勲章と共に身につける星章を想起させるものである。そしてその彼女はシクラメンやスマレと共に描かれているが、これらはイギリスでも生長するヨーロッパ産あるいは北半球産の花である。そして慰問からの帰途でも Mrs Ramsay は再びシクラメンとスマレと重ねて描写されている (TL 15)。Mrs Ramsay は、ヴィクトリア女王を通じて帝国の支配者かつイギリスの自然を表象する存在となっているのである。

Mrs Ramsay の別荘は、帝国の植民地支配を象徴する場ともなっている。作品の冒頭で、彼女の息子は the Army and Navy Stores のイラスト付きカタログから様々な製品を切り取って遊んでいるが、この会社は “the enterprise that specialized in providing the colonial establishment with the goods needed to maintain a civilized English life throughout the Empire” (Carr 197) であった。さらには、Mrs Ramsay は男性たちが帝国を守っているという意識を強く持っていたがそれは次のような理由によるものであった。彼女は、“[T]hey [men] negotiated treaties, ruled India, controlled finance” (TL 9) であり、“[T]here was in all their [men’s] minds a mute question of … the Bank of England and the Indian Empire” (TL 9) という認識を示すのである。実際、彼女には植民地帰りの友人や親せきがいる。ジェイムズ叔父も (TL 67)、彼女の別荘に泊りがけで遊びに来ている Mr Carmichael もインド帰りである (TL 12)。

彼女の別荘では植民地原産の植物や食べ物が消費され享楽の対象となっていることを Bradshaw は指摘し、その例として、別荘には温室があることや、食事でコーヒーやバナナが食され、エキゾチックなコンク真珠が装飾品として使用されていることを挙げている (xxxiii)。とくに温室は一度も描写されないものの、修理代に50ポンドかかることが4度にわたり彼女の口から語られ (TL 35, 51, 51, 55)、彼女にとって大きな関心事であることがわかる。花壇の手入れのために庭師が雇われており、花壇のほかに温室を設置していることから、彼女は、スコットランドの気候では育たない外国の植物の栽培に情熱を傾けていた可能性が高い。Bradshaw は、Mrs Ramsay がジャックマナ、アルゼンチン産のシロガネヨシ、南アフリカ原産のシャグマユリ、中米原産のダリアを植え、これらはもとは「球根」や「種」としてイギリスに運ばれてきたことと、Mrs Ramsay が自宅から別荘に球根や種を送り庭師に世話をさせようとしていることを重ね合わせて、彼女の別荘が “the Empire’s coercive domestication of the remote” (xxxiii) となっていることを指摘している。温室栽培でその土地原産ではない植物を育てる彼女の行為は、動物園での外国原産の動物を飼育する行為と重なって来るともいえよう。

本論が特に注目したいのは、Mrs Ramsay が、花壇と温室の世話をさせている庭師の怠惰を嘆いている点である。“The question was, what happened if she sent bulbs down; did Kennedy plant them? It

was his incurable laziness; she added, moving on. If she stood over him all day long with a spade in her hand, he did sometimes do a stroke of work” (TL 56). 庭師が勤勉でない限り、本来その土地固有のものではない外国原産の植物が育つことはない。エキゾチックな植民地の動植物をイギリスの土地で育て順応させる行為は“acclimatization”と呼ばれるが、イギリスは“the Empire of Acclimatization”であった (Brantz 86)。そして動植物をイギリスの環境に適応させるためには、人間が科学や文明の発達で得た力をもって対応する必要があった (Brantz 87)。つまり、帝国の野性を飼いならすには、勤勉と科学の知識が必要だったのである。庭師の Kennedy が足に怪我を負い庭の世話を放棄した後、別の庭師が雇われるが、この庭師も送られてきた種を律儀に蒔くような人物ではないことがほのめかされている (TL 115)。こうして世話を放棄された庭では、この土地固有の動植物が我が物顔で生を謳歌するようになるのである。ポスターが登場する第1部から10年の時を経た第2部でまず登場する生き物は、ヒキガエルであるが、植物として初めて描写されるのはスコットランド国花のアザミである (TL 112)。ほかに燕、ネズミ、ヒオドシチョウが描かれるが (TL 112-13)、“Poppies sowed themselves among the dahlias” (TL 113) という描写においては、本来ケシが咲く土地に中米原産のダリアが acclimatization の産物として植えられていた事実が浮かび上がってくる。庭師が勤勉にこまめに手入れをしない限り、Mrs Ramsay の別荘に世界各地に広がる植民地の風景を維持することはできないのである。³

Mrs Ramsay が花壇や温室で植物を楽しむためには、怠惰を排除し、勤勉な労働力が必要となる。このことは、荒れ果てた別荘に二人の老女と、そのうちの一人の息子が手入れにやってくることで確認できる。老女たちは、“Oh, they said, the work!” (TL 114) と大変な労働であることを嘆きつつ、健気に掃除を始め、腐敗と墮落からこの場を救い清めるのである。“Slowly and painfully, with broom and pail, mopping, scouring, Mrs McNab, Mrs Bast stayed the corruption and the rot” (TL 114). 老女の一人の息子が、早速ネズミを捕まえ、雑草を刈り取るさまが描かれ (TL 114, 115)、“He was a great one for work” (TL 115) と称えられる。

『灯台へ』というテキストは、怠惰を排除し勤勉を志向することで、帝国の風景を国内で再現し、維持しようとしているのである。本作品は、支配と抵抗の関係があることを踏まえたうえで大英帝国の動植物を飼いならそうという Mrs Ramsay の意志に満ちているのである。

3. 帝国の衰退を食い止めるために

ポスターが張られていた1909年は、植民地の動植物を通じた“the domestication of empire” (Brantz 73) を気楽に志向できる時代ではなかった。イギリスが大英帝国としての絶頂期を過ぎ、すでに衰退の兆しを見せ始めていたという認識が広がっていたからである。とくにこの兆候を明らかにしたのが、1899年から1902年まで続いた南アフリカ戦争であった。激戦の末イギリスが勝利したものの、こ

の戦争が明らかにしたのは帝国を支えるはずの人口の大多数を占める労働者階級の身体が虚弱であるという事実であった。徴兵検査を受けたもののうち40%から60%が身体的あるいは精神的に軍隊での業務に適さないことが明らかになったのである (Whitworth 33)。

こうした時代状況において、Mrs Ramsay は帝国の衰退を食い止めるべく奮闘する。彼女は、労働者階級への換気指導と栄養指導を通じて、帝国を内から蝕む病に立ち向かおうとしているのである。病気の女性を慰問した Mrs Ramsay は、病人に次のようなアドバイスを与えるのである。“[T]hey must keep the windows open and the doors shut” (TL 15)。これは当時流行していた結核のための予防法と治療法であり、Ramsay 一家が訪問しようとしていた灯台守の息子が結核性関節炎で苦しんでいる設定と重ね合わせて、換気による衛生指導で病に立ち向かおうとする Mrs Ramsay の意志を表していると言えよう (Bradshaw xxiii)。また彼女は、結核予防として栄養を摂取するために「乳製品製造所 (dairy)」の建設を進めるべきだとことあるごとに説いて回っている (Bradshaw xxiv)。「病院と下水道と乳製品製造所」についての必要性を説くさまは “passionately” である (TL 49)。

彼女がこうした問題に目を向けるのも、貧困問題への関心からであった。ちょうど南アフリカ戦争による身体の虚弱化が発見されたころ、貧困が新たに科学的に発見されたのである。それが、ラウントリーとブースによる統計学を駆使した都市における貧困研究であった。それまでも貧困問題は多くの人によって取り上げられ救貧法の是非を巡って様々な取り組みがなされていたが、両者は科学的な手法による調査で貧困の実態を明らかにしたため衝撃が大きかったのである。彼らにならい、Mrs Ramsay は、科学的に貧困問題を解明しようとする。

But more profoundly she ruminated the other problem, of rich and poor, and the things she saw with her own eyes, weekly, daily, here or in London, when she visited this widow, or that struggling wife in person with a bag on her arm, and a notebook and pencil with which she wrote down in columns carefully ruled for the purpose wages and spendings, employment and unemployment, in the hope that thus she would cease to be a private woman whose charity was half a sop to her own indignation, half a relief to her own curiosity, and become, what with her untrained mind she greatly admired, an investigator elucidating the social problem. (TL 11)

Mrs Ramsay のこうした活動は、加藤によれば Charity Organization Society という慈善団体が確立した社会調査の手法と同様のものである (694)。この協会の戸別訪問は、為政者が権威をかさに着て労働者の生活に干渉するものであり、また植民者が植民地を探検したように、社会調査も労働者を植民地化し、様々な規範から逸脱したグループを分類・分析・統制する点で帝国主義的だった点が特徴的であった (加藤 694)。

Charity Organization Society が、困窮者への援助において他の慈善団体と大きく異なっていたのが、受給審査資格に「自助・自立の倫理を内面化している失業者」であることと定めていた点であっ

た(山本 141)。ラウントリーとブースの科学的な貧困の発見は、それまで怠惰が原因だと思われていた貧困の原因が怠惰やその他の悪徳といった労働者の性格に起因するものではなく、絶対的な貧困が存在することを明らかにした点で衝撃的であった。このことがきっかけとなり、救貧法で禁じられていた院外救済も止む無しとの認識が広がっていたにもかかわらず、当協会はそれを是とせず、勤勉に働き節制した生活を送っていても貧困に陥った「リスペクタブルな」労働者だけを救済対象とし、自助の精神を身に着けていない労働者への救済を無分別なものとして退けたのであった。つまり Charity Organization Society が推奨する慈善活動を行っている Mrs Ramsay の帝国の衰退を食い止めようとする試みは、無節制や怠惰を排除し、勤勉や節制といったいわゆる「自助」の美德を広めようとする教化活動であったと結論付けられよう。

本作品における Mrs Ramsay が推奨していたのは、壮健な身体と健全な精神の育成により帝国の衰退を食い止め、帝国の風景を国内で維持しようとする試みだったのである。

4. Mrs Ramsay とサーカス

『灯台へ』というテキストが、帝国の支配と抵抗や帝国の衰退という危機をはらむ言説から成り立っていることを確認してきたが、ここでその衰退を食い止める決意を秘めた Mrs Ramsay がサーカスのポスターを見て喜ぶその意味を考察したい。動物園と同様に、サーカスはあらゆる人々を惹きつけていた。“[T]he circus attracted a wide variety of spectators of both sexes and different classes, regions, and ages” (Assael 1). そのあらゆる人々にサーカスが提供したものは、勤勉と訓練によって培われた壮健な肉体から繰り出される団員の芸と、勤勉と訓練によってコントロールされた野生動物の芸である。つまり、エンターテイメントという形態で視覚化された勤勉による帝国の勝利である。これまでの議論を踏まえれば、サーカスにおいて、植民地の動物が調教師の訓練により芸を披露するのも、日々の鍛練で身体を鍛え上げた団員が芸を披露するのも、植民地からの抵抗と内なる衰退に苦しみ大英帝国の斜陽に逆らうベクトルが働いているといえよう。サーカスは、大英帝国の衰退を食い止め、その栄光を賛美し、身体と精神の鍛練を通じて帝国を支える意志を表象するものとして読み解くことが可能である。

特に1880年代から1900年代にはライオン、トラ、象などがサーカスで用いられ始めており人気を博していた。トラやライオンの扱いはリスクが付きものだった。“[T]here were … the prurient risk of a lion tamer being eaten by his or her charges (which happened surprisingly frequently)” (Simons 90). それにもかかわらず、調教されたサーカスの猛獣は次の2点を示す存在であった。“The first was the right of dominion that man enjoyed by divine decree over the rest of sentient creation. The second was the dominion of western empires … over other cultures” (Simons 92). 興味深いのは、時代が下って1937年にサーカスの猛獣の調教についての感想を述べた Burleigh が、猛獣と調教師の関係を国家間

の権力闘争になぞらえていることである。“Looking on mixed group of lions and tigers, polar bears and brown bears reminds me of the League of Nations. All is peace so long as the trainer is there to keep order, but if he trips chaos results and the blood flows.” 猛獣と調教師との力の均衡は国家間の覇権争いを想起させるものであったのである。これらの動物の芸について言えば、次のように結論付けられるだろう。“The trained exotic animal was considered to demonstrate an evolutionary improvement, so animal training became associated with progress. The trained act also demonstrated how the trainer could control movement on command, in what was still a display of dominance” (Tait 16). サーカスの猛獣は、常にいつ牙をむくかわからないという抵抗の力を秘めつつも、調教に従うことで帝国支配がその身体に刻印されるのである。同時に猛獣は、その猛獣を飼いならした人間の勤勉と努力を称える存在にもなるのである。

次に、空中ブランコなどの芸について考察しよう。“In this consummate age of industry and empire the strong body became a metonym for progress and power” (Assael 1). とくに訓練され鍛え上げられた団員の身体は、“a unique aesthetic that blends athleticism and artistic expression” (Tait *Circus Bodies* 2) であった。一方でサーカスの芸を支えるのは、勤勉、訓練、正確さを可能にする強い精神力であり、自助・自立の精神である。

[T]hey [performers] were integrated into the new industrial order and compelled to adhere to a strict time-work discipline in rehearsal, in performance, and in getting and maintaining engagements. Thus they contributed to a perfect assembly line of production: on the one hand, unique and autonomous; on the other, disciplined and part of organic whole. (Assael 7)

サーカスは、動物園や植物園、そして Mrs Ramsay の温室や花壇のように、帝国のありようを映し出す場であった。現実の大英帝国が衰退し始め、Mrs Ramsay がそれを食い止めるための活動に従事していたなかで、サーカスで披露される芸は、植民地をコントロールし、帝国を支える人間の肉体を鍛え上げるものであり、なによりも勤勉と訓練の賜物が可視化される場であったのである。一方で、力と精神力で無理に帝国を支えるのではなく、新たな時代にふさわしく管理された生産ラインをひそやかに想起させ、帝国経営に代わる経済活動があることを、そしてそこでの勝利こそを目指すべきであることを教えるのである。

Mrs Ramsay にとってのサーカスとは、帝国の衰退に対して抵抗し改善しようとする強固な意志を持つ彼女が自らの正当性を確認する場であり、同時に新たな国家の経営にも規律・勤勉・訓練・向上心といった精神力が必要とされていることを確認しさらなる教化を誓わせる場であったのである。

註

- 1 Woolf, Virginia. *To the Lighthouse*. Oxford: Oxford UP, 2006. 以下、本書からの引用は TL と略しカッコ内に続けてページ数を記す。
- 2 実際のサーカスではほかに、犬、ヤギ、ロバのほかに象、ホッキョクグマ、蛇、カンガルー、ヒョウなどの植民地原産の動物もいた (Burleigh)。
- 3 この場面が同時に示すのは、支配と抵抗の緊張関係でもある。Kennedy はアイルランド系の名前であり、

イングランドの植民地として搾取に苦しめられていたアイルランドを想起させる。またこの別荘があるスコットランドもイングランドによる支配を受けていた歴史がある。つまり、帝国主義者 Mrs Ramsay がスコットランドで植民地原産の植物を acclimatization するために雇ったのがアイルランド人であるという 2重3重の支配—被支配の関係が成立するとき、Kennedy の怠惰はイングランドへの抵抗の表れとして読み解くことができ、アイルランド人が帝国を支えることを放棄したことでスコットランドの国花アザミが咲き始めたと解釈できるのである。

引用文献

- Bradshaw, David. Introduction. *To the Lighthouse*. By Virginia Woolf. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Brantz, Drothee. "The Domestication of Empire: Human-Animal Relations at the Intersection of Civilization, Evolution, and Acclimatization in the Nineteenth Century." Kete, Kathleen ed. *In the Age of Empire*. A Cultural History of Animals 5. Oxford and New York: Berg, 2011.
- Burleigh, Bertha Bennet. *Circus*. London: Collins, 1937.
- Carr, Helen. "Virginia Woolf, Empire and Race." *The Cambridge Companion to Virginia Woolf*. Susan Sellers ed. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Kete, Kathleen. "Animals and Human Empire." Kete, Kathleen ed. *In the Age of Empire*. A Cultural History of Animals 5. Oxford and New York: Berg, 2011.
- Rothfels, Nigel. "How the Caged Bird Sings: Animals and Entertainment." Kete, Kathleen ed. *In the Age of Empire*. A Cultural History of Animals 5. Oxford and New York: Berg, 2011.
- Simons, John. *The Tiger That Swallowed the Boy: Exotic Animals in Victorian England*. Faringdon: Libri, 2012.
- Tait, Peta. *Circus Bodies: Cultural Identity in Aerial Performance*. London and New York: Routledge, 2005.
- . *Wild and Dangerous Performances: Animals, Emotions, Circus*. Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2012.
- Whitworth, Michael H. *Virginia Woolf*. Oxford: Oxford UP, 2005.
- Woolf, Virginia. *To the Lighthouse*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- 伊藤剛史「19世紀ロンドン動物園における科学と娯楽の関係—文化の大衆化とレジャーの商業化に関する一考察—」『社会経済史学』第71巻6号(2006)
- 加藤めぐみ「ミルクと帝国主義と—ウルフにおける「母性」の言説—」『英語青年』第143巻第12号(1998)
- 山本卓「福祉の分業の溢路—ロンドン慈善組織協会と「リスペクタブルな」失業者—」岡村東洋光・高田実・金澤周作『英国福祉ボランティアの起源—資本・コミュニティ・国家』ミネルヴァ書房、2012年

【Abstract】

Diligence and Entertainment:
The British Empire, Circus, and Charity in Virginia Woolf's *To the Lighthouse*

Miyuki INOUE

In Virginia Woolf's *To the Lighthouse* (1927), the heroine gets very excited when she sees a poster of circus with the illustration of acrobats, horsemen, seals, lions and tigers. To clarify the reason why the poster makes her excited and elated, this paper explores the social contexts of the period from the late 19th century to early 20th century, when the circus and charity attracted British people. Although these two seem mutually independent, actually they share similarities leading to the undercurrent of glorification of the Empire and the fear for decline and degeneration. To fight against the latter, the importance of diligence is taught to the working class people by acts of charity that the heroine engages in. The emphasis of diligence is also observed in taming of circus wild animals and bodybuilding as circus acrobats. Therefore, the heroine, who is eager to do something in charity and social improvement, gets excited when circus offers the show of diligence in the form of entertainment.